

四弘誓願の源流

香 川 孝 雄

一 はじめに

「衆生無辺誓願度」以下四句よりなる四弘誓願は、文献では天台智顗（五三八―五九七年）の『釈禪波羅蜜次第法門』に記されている次の文が最初であるとされる。

四弘誓願者。一未_レ度者令_レ度。亦云衆生無辺誓願度。二未_レ解者令_レ解。亦云煩惱無數誓願斷。三未_レ安者令_レ安。亦云法門無尽誓願知。四未_レ得涅槃令_レ得涅槃。亦云無上仏道誓願成。此之四法。即對_二四諦_一。故瓔珞經云。未_レ度苦諦令_レ度苦諦。未_レ解集諦令_レ解集諦。未_レ安道諦令_レ安道諦。未_レ証滅諦令_レ証滅諦。

ここに説かれている度、斷、知、成の四弘誓願は、衆生を度し、解し、安んじ、涅槃を得せしめるためであり、これらの一々は苦、集、滅、道の四諦に配されている。この文中に明かすごとく、四諦に配することは『瓔珞經』の説である。ところでこの經典は、望月信亨博士の研究によれば、梁代以

前に中國で撰述されたものである、と推定されている。したがって、この經典によつて四弘誓願の源流を探ることはできないが、智顗がこの經典の説を受けていることは事實である。

『瓔珞經』以外に、四弘誓願の源を經典に求めたのは梁の法雲（四六七―五二九年）である。彼は『法華義記』に『法華經藥草喻品』の文を解して「從_二未度者令度_一下明_二四弘誓之德_一」と述べていることは、中國において四弘誓を『法華經藥草喻品』の文と結びつけた最初であろう。彼はまた「譬喻品」の註釈のところでも

未_レ解者令_レ解。未_レ度者令_レ度。此兩誓則持_二大悲拔苦_一也。未_レ安者令_レ安。未_レ涅槃者令_レ得_二涅槃_一。此兩誓則持_二大慈与樂_一也。

と、「未_レ解者令_レ解」などの前二句を「大悲拔苦」、「未_レ安者令_レ安」などの後二句を「大慈与樂」の誓願として解釈している。智顗が、『摩訶止観』において、四弘誓願の前二句を大悲、後二句を大慈の願であると説いているのは、法雲の説に

基ついていると思われる。ところで法雲の指摘した「菓草喻品」の文は仏の徳を讃歎して、仏は「未_レ度者令_レ度。未_レ解者令_レ解。未_レ安者令_レ安。未_レ涅槃者令_レ得_レ涅槃。」と自讃した句であつて、誓願として説かれているわけではない。本論では、この四句が仏徳讃歎から四弘誓願へと展開した過程、および四句の定型化について検討したい。

二 仏徳讃歎の定型文

前述の『法華経菓草喻品』に出る仏徳讃歎の四句に似た文は、大乘仏教の創説ではなくて、漢訳の『阿含経』や、パーリ經典の中にも見られる。例えばパーリ『長部』“Udumbarika-sihanāda sutta” およびパーリ『中部』“Cūḍasa-ccaka sutta”⁽³⁾ には、仏徳を讃歎して次のように説いている。

Buddho so Bhagavā bodhāya dhammaṃ deseti,
danto so Bhagavā damathāya dhammaṃ deseti,
santo so Bhagavā samathāya dhammaṃ deseti,
tiṇṇo so Bhagavā taraṇāya dhammaṃ deseti,
parinibbuto so Bhagavā parinibbāṇāya dhammaṃ deseti.

彼の世尊は、「自ら」覚りおわつて「他を」覚らしめんがために法を説く。

彼の世尊は、「自ら」調御しおわつて、「他を」調御せしめんがために法を説く。

四弘誓願の源流（香川）

彼の世尊は、「自ら」安隱となりおわつて「他を」安隱ならしめんがために法を説く。

彼の世尊は、「自ら」度脱しおわつて、「他を」度脱せしめんがために法を説く。

彼の世尊は、「自ら」般涅槃しおわつて「他を」般涅槃せしめんがために法を説く。

“Udumbarika-sihanāda sutta” に対応する漢訳『長阿含経』には次のように説かれている。

瞿曇沙門。能説_二菩提。自能調伏。能調_二伏人。自得_二止息。能止_二息人。自度_二彼岸。能使_二人度。自得_二解脫。能解_二脫人。自得_二滅度。能滅_二度人。

この経の異訳である施護訳『仏説尼拘陀梵志経』には「覚悟・解説・安隱・涅槃」の四徳が説かれて仏を讃歎している。

また“Cūḍasa-ccaka sutta” に対応する漢訳は『雜阿含経』巻五にあつて

世尊。覚_二一切法。即以_二此法。調_二伏弟子。令_レ得_二安隱。令_レ得_二無畏・調伏・寂靜。究_二竟涅槃。

と、少し形は変つてゐるものの、いずれも自覚、覚他の仏徳を讃歎したもので、誓願文ではない。これが定型化されて、南北両伝に伝えられていることは、かなり早い時代に、この定型文が成立していたことを示唆するものである。この様に定型化された四句が『法華経』にも採り入れられたものと思

われるが、この文を詳細に諸本対照すると一つの問題点に突き当るのである。

『正法華經』（正本）

吾為⁽¹⁾如來。使⁽²⁾天上天下諸天世人。未⁽³⁾度者度。未⁽⁴⁾脫者脫。未⁽⁵⁾安者安。未⁽⁶⁾減者令⁽⁷⁾得⁽⁸⁾減度。

『妙法華經』（妙本）

我是如來。應供正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。仏世尊。未⁽¹⁾度者令⁽²⁾度。未⁽³⁾解者令⁽⁴⁾解。未⁽⁵⁾安者令⁽⁶⁾安。未⁽⁷⁾涅槃者令⁽⁸⁾得涅槃。

『梵文法華經』（S本）

tathāgato 'smi bhagavanto deva-manuṣyā arhan samyak-saṃbuddhas tīrṇās tārayāmi mukto mocayāmi āśvasta āśvāsayāmi parinirvṛtaṃ parinirvāpāyāmi⁽²⁾

汝ら、神々や人々よ、私は如來・應供・正等覺者である。私は「自ら彼岸に」渡りおわって、「他の人々を」渡らせ、「自ら」解脱しておわって、「他の人々を」解脱せしめ、「自ら」安隱となつて、「他の人々を」安隱ならしめ、「自ら」般涅槃しおわつて、「他の人々を」般涅槃せしめるのである。

『チベット訳』（T本）

lha dai mi dag ia de bshin gśegs pa dgra bcom pa yai dag par rdsogs pañi sans rgyas te / rgal nas bsgyal lo grol nas dgroi lo // dbugs phyin nas dbugs dbyun rō // yois su mya nan las h̄das nas yois su mya nan las bzlaho⁽²⁾ //

諸々の神々や人々よ、我は如來・應供・正等覺者であつて、「自ら彼岸に」渡りおわって「他の人々を」渡らしめ、「自ら」解脱しおわって「他の人々を」解脱せしめ、「自ら」安隱となりおわつて、「他の人々を」安隱ならしめ、「自ら」般涅槃しおわつて「他の人々を」般涅槃せしめる。

右の四本を較べると、『正本』、『妙本』の漢訳と『S本』、『T本』とは文体が異なることに注目したい。すなわち漢訳の二本では「未だ度せざる者を度せしめ、」という文であるのに対して、『S本』、『T本』では「〔自ら彼岸に〕渡りおわつて、〔他の人々を〕渡らしめ」となつていて、この方が、阿含、ニカヤの文意とよく合致している。右の梵本はネパール本とギルギット本であり、両者に全く異なるところはないが、カシユガル出土本の梵本では次の様になつてゐる。

tathāgato 'han asmi bhagavan sa-deva-manuṣyāsaurasya loka-syārhan samyaksaṃbuddhas tīrṇās tārayāmi amukto maucayāmi anāśvasta āśvāsayāmi aparinirvṛtaṃ parinirvāpāyāmi⁽²⁾

世尊よ、私は如來であり、天・人・阿修羅を含む世間の尊敬に値するものであり、正等覺者である。私はすでに「彼岸に」渡りおわつて、「他の人々を」渡らせ、未だ解脱せざる者を解脱せしめ、未だ安隱とならないものを安隱ならしめ、未だ般涅槃しないものを般涅槃せしめるのである。

この文によると、最初の *tiṃras tārayāmi* を除いて、*anukto naucyāmi* 以下の句は、漢訳の両本が「未脱者（妙本は未解者）」云々と否定辞を加えている時とよく合致する。第一句のみ否定辞がついていないことは不揃いであるが、ネパール本やギルギット本のように否定辞を伴わないテキストもあったために混乱したのであろう。

以上の諸例より、「自ら彼岸に」渡りおわって「他の人々を」渡らしめ」という系統（A型）と、「未だ「彼岸に」渡らない者を渡らしめ」（B型）の二つの系統があったことを知り得る。この二つのタイプは次に述べる誓願として説かれた四句においても受け継がれている。

三 大乘經典における四弘誓願

初期大乘經典の中でも最古層に属すると考えられている小品系の『般若經』に、すでに四弘誓願が説かれている。梵文の『八千頌般若經』によって示すと次のごとくである。

Yad bhūyaśā mātṛayā paripīḍiṇṇaṃ janyaṃsiyanti anuttarāyaṇaṃ saṃyaksambodhaṃ imāni saṃsārāvacaṛāṇi duḥkhaṇi satvānaṃ saṃpaśyantaḥ // tat kasya hetoḥ / taya mahā-karūṇayā arha-kāmā hīta-kāmā hi te sa-deva-mānuṣasūryasya lokasyānu-kampakā ya imair evaṃrūpāis cittōpādaiḥ samanvāgataḥ kim itī veyyaṃ tīṇāḥ sattvāṃs tārayema mukā moocyema āśvāsā

四弘誓願の源流（香 川）

āśvāsayema parimivijjāḥ parimivāpāyema ity etasī cittōpādair vibharanti //⁽²³⁾

衆生たちの中で、輪廻に住し、苦しんでいるのを見る人たちは、無上なる正等覚になお一層多くの誓願を起こすであろう。それは何故か。この様な発心を見える彼らは、かの大慈悲をもって饒益と利益とを願ひ、天・人・阿修羅を含む世間を哀れんで「どうすれば我々は「自ら彼岸に」渡って、諸々の衆生たちを「彼岸に」渡らせ、「自ら」解脱して「他を」解脱せしめ、「自ら」安隱となつて「他を」安隱ならしめ、「自ら」般涅槃して「他を」般涅槃せしめることができるか、というこれらの心を起こして住するのである。

ここに説かれているのは明らかに四種の誓願であつて、文章の形式としては、仏徳讃歎のA型をそのまま採用しているところである。チベット訳も梵文の通りで変りはない。⁽²⁰⁾ところで漢訳諸本を検討すると、文章の形式を異にしている。

道行經 ⁽²¹⁾	大明度經 ⁽²²⁾	小品般若 ⁽²³⁾	仏母般若 ⁽²⁴⁾	大般若第四会 ⁽²⁵⁾
諸未度者悉 当度之	諸未度者吾 当度之	我自得度当 度未度者	未得度者普 令得度	我既自度生死大 海亦当精勤度未 度者
諸未脱者悉 当脱之		我自得脱当 脱未脱者	未解脱者普 令解脱	我既自解生死繫 縛亦当精勤解未 解者

諸恐怖者悉 当安之	恐怖者吾当 安隱之	我自得安当 安未安者	我於種種生死恐 怖既自安隱亦当 精勤安未安者
諸未般泥洹 者悉皆当令 般泥洹	諸未減度者 吾当減度之	我自減度当 度未減度者 令涅槃	我既自証究竟涅 槃亦当精勤令未 証者皆同証得

右の対照表を見て注意すべきは、第一に、『大明度經』と『仏母般若經』とは三種の誓願を説いているに過ぎない。このことは、未だ四弘誓願として四種の誓願に固定化していないことを示している。第二に『道行經』、『大明度經』、『仏母般若經』はB型の誓願文であるのに対し、『小品般若』と『大般若經』はA型とB型とを合糅した、いわばA型とでも云い得る形式をとっていることである。

この様な四種の誓願は小品系の『般若經』にも出ているので、次にその諸本を対照して見よう。

放光般若經 ⁽²⁶⁾	摩訶般若經 ⁽²⁷⁾	大般若第二会 ⁽²⁸⁾
我等已度当復度不 度者	我既自度亦当度未 度者	我既自度生死大海。亦当 精勤度未度者
者	我既自脱当脱未脱 者	我既自解生死繫縛。亦当 精勤解未解者

我已安隱当復安余 者	我既安隱当安未安 者	我於種種生死怖畏既自安 隱。亦当精勤安未安者
我已泥洹当復度余 令得泥洹	我既減度当使未入 減度者得減度	我既自証究竟涅槃。亦当 精勤令未証者皆同証得。

右の表のよると、『放光般若經』のみは、三種の誓願であり、他は四種の誓願を説いている。そして三本のすべてが「我、既に自ら度して、亦、当に未だ度せざる者を度すべし」というA型になっている。

般若經類の四句の誓願文が、B型とA型であることを見たが、干潟龍祥博士が四弘誓願の基になったであろう、と指摘されている『三曼陀跋陀羅菩薩經』はどうであろうか。

未^レ度者我当^レ度^レ之。未^レ脱者我当^レ脱。未^レ般泥洹者我当^レ令^レ般泥洹。造作一切人。皆令^レ発阿耨多羅三耶三善心。⁽²⁹⁾

この文を見ると、三種の誓願であり、形式としてはB型である。

次に『悲華經』にもこの様な誓願がある。

若我来世得^レ必阿耨多羅三藐三菩提。度^レ未度者。解^レ未解者。未^レ離生老病死憂悲苦恼^レ悉令^レ得^レ離。未^レ減度者令^レ得^レ減度。⁽³⁰⁾

aham anuttarāṃ samyakṣanbodhim abhisambuddhaṃ, aśrīṇāṃ satvāṃśa tarayeyam, amuktaṃ mocayeyam jati-jarā-ryādhi-marāṇa-sōka-parideva-duḥkha-daumansyōpāyāśebhyaḥ, apa-rinirvāṇaṃ satvāṃ parinirvāpayeyam /⁽³¹⁾

私は無上正等覺を証得して、未だ〔彼岸に〕渡らない衆生たちを渡らしめ、未だ生・老・病・死・憂・悲・苦・惱・不安より解脱しないものたちを解脱せしめ、未だ般涅槃しない衆生たちを般涅槃せしめるであろう。

『悲華經』の場合、漢訳は四種の誓願であるに對し、梵本は三種であるが、内容は同じと見てよい。誓願文の形式はA型である。

この様に大乘經典に出てくる誓願には、三種のものと四種のものがあり、形式としてはB型とA型に分かれるのである。

四 部派關係文獻における四句の誓願

説出世部の所伝である『マハーヴァストゥ』には、メーガ青年は燃灯仏に對して「私もその様な徳を具えた仏となりた」と誓願して云う。

aho punar ahaṃ pi bhaveyaṃ angatam adhvānaṃ tathāgato
rhaṇ samyaksaṃbuddho vidyā-carāṇa-saṃpannaḥ sugato loka-
vid anuttarāḥ puruṣa-dāmya-sārathīḥ śāstā devānaṃ ca manu-
syānaṃ ca yathābhaṇaḥ Bhagavān Dīpaṅkaro etarahiṃ //
evaṃ tīrṇo tārayeyaṃ mukto mocayeyaṃ āsvasto āsvāsayeṃ
yathābhaṇaḥ Bhagavān Dīpaṅkaro etarahiṃ⁽²⁾
ああ、また私も現にかのディーパンカラ世尊がそうであるよう

四弘誓願の源流(香川)

に、未來の世に如来・応供・正等覺・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師となりたいものだ。……現にかのディーパンカラ世尊がそうであるように、「自ら」度脱して〔他の人々を〕度脱させたい。「自ら」解脱して〔他の人々を〕解脱させたい。「自ら」安隱となつて〔他の人々を〕安隱ならしめたい。

この様なメーガの誓願を知つたディーパンカラ世尊は、メーガに授記を授けて、次の様に語られた。

evaṃ tīrṇo tārayisyasi mukto mocayisyasi āsvasto āsvāsayiṃ
syasi parinirvīto parinirvāpēyisyasi yathāpi ahaṃ etarahiṃ⁽³⁾
現に私がそうである様に、汝は度脱しおわつて〔他の人々を〕度脱せしめるであろう。汝は解脱しおわつて〔他の人々を〕解脱せしめるであろう。汝は安隱となつて〔他の人々を〕安隱ならしめるであろう。汝は般涅槃しおわつて〔他の人々を〕般涅槃せしめるであろう。

ここに語られているメーガの誓願は三種であるが、ディーパンカラの授記は四種となっており、仏徳讃歎の定型文A型が、ここにそのまま利用されていることを知る。

同じくアヴァダーナ文獻類で『アヴァダーナ・シャタカ』にも四句の誓願が出ている。

atirāṇaṃ satirāṇaṃ tārayiā amukāṇaṃ mocayīā anāsva-
tānaṃ āsvāsayīā aparinirvāṇaṃ parinirvāpayīeṃ⁽⁴⁾
〔私は〕未だ〔彼岸に〕渡らない衆生たちを〔彼岸に〕渡らしめ、未だ解脱しない〔衆生たち〕を解脱せしめ、未だ安隱でない

「衆生たち」を安隱ならしめ、未だ般涅槃しない「衆生たち」を般涅槃せしめる、と。

この文は定型化されて、第一品の九つの説話中、八つの説話に出ている。これに対応する漢訳『撰集百緣經』では次の様な定型文をもつて説かれている。

無_レ帰依_一者_ニ為_ス作_ス歸依。無_レ救護_一者_ニ為_ス作_ス救護。無_レ解脫_一者_ニ為_ス作_ス解脫。無_レ安隱_一者_ニ為_ス作_ス安隱。未_レ涅槃_一者_ニ令_ス使_ス涅槃_一。

これは「菩薩授記品」第一に十緣ある中、第六緣を除く九緣に出ている誓願である。梵文では四種の誓願であるに對し、漢訳では五種の誓願が出ているが、文章の形式としてはB型に属する。『アヴァダーナ・シャタカ』の所属部派について、岩本裕博士は有部の所伝と考えておられる。もしそうだとすれば有部にも四句乃至五句による誓願の思想があつたということになる。

同じく有部の『十誦律』には、阿難が仏の功德を讀えて今出家得_ニ阿耨多羅三藐三菩提_一。未_レ度者_度。未_レ解者_解。未_レ減者_減。未_レ度_一生老病死憂悲苦恼_一者_度。

と述べている。この文は誓願ではなくて、仏徳を讚歎したものであるが、B型によつて表現されている。しかし『薩婆多毘尼毘婆沙』では

仏三阿僧祇劫立_ニ四弘誓_一。欲_ニ濟_一無_レ辺衆生_一。

と「四弘誓」という語を用いているところから、有部内にお

いて右の様な四句による誓願思想のあつたことが認められるであらう。

また法藏部所伝の『四分律』においても、慧灯王が天帝釈の問いに答えて

我作_ニ如_レ是意_一。行_ニ布施_一欲_ニ求_ニ無上正真一切智_一。度_ニ未_レ度者_一。解_ニ未_レ解者_一。未_レ得_ニ涅槃_一者_ニ令_ス得_ス涅槃_一。度_ニ生老病死憂悲苦恼如是等_一者_上。

と、B型の形式によつて誓願を述べている。

以上の考察によつて、四句の誓願は大乗仏教ばかりではなく、説出世部、説一切有部、法藏部等の部派においても認められる。

五 むすび

梁の法雲によつて指摘された如く、四弘誓願の四句は『法華經藥草喻品』の文より由來する。しかしその文は誓願ではなくて、仏徳を讚歎するものであつた。仏徳讚歎の四句は阿含、ニカーヤにおいても認められるものであり、古くから定型化していた四句を『法華經』が採用したのであらう。誓願思想の發達と共に、それが誓願文として利用された。それは『マハーヴァストゥ』が述べる如く、「我も仏の様な徳を具えた仏になりたい」という願ひから、仏徳讚歎の四句が誓願の四句として転化したのであらう。この誓願の四句は大乗仏

教のみならず、説出世部、有部、法藏部などの部派にも認められる。但し南伝仏教にはこの様な四句の誓願は存在しない。また最初から四句と決まっていたわけでもなく、三句のものもあり、内容も一定していない。それが次第に四句に定型化され、前引の『薩婆多毘尼毘婆沙』や『不退転法輪經』、『仏性論』⁽⁴⁾では「四弘誓」という語を用いて、内容の説明は全くない。つまり説明の必要がないほど「四弘誓」が仏教界に知れわたっていたのであり、その段階では四句に定型化されていたことを示している。

また仏徳讃歎の四句にはA型、B型の二つの系統があり、それをそのまま誓願文にも継承しており、やがてAB型という形式も生まれた。この発展順序は単なる推測に過ぎないがA型→B型→AB型という順序でなかろうかと思考する。

- 1 関口真大『天台止観の研究』一六〇—一六二頁 多田孝正「慧思の菩薩観—四弘誓願を中心として—」(『印仏研』第二十三卷、第二号 三〇九—三一二頁)
- 2 智顗『釈禪波羅蜜次第法門』卷一之上(大正四六 四七六b) 同じく智顗の『法界次第初門』卷下之上(大正四六 六八五c—六八六a) にも『瓔珞經』を引いて一々の願に四諦を配している。

- 3 『菩薩瓔珞本業經』卷上(大正二四、一〇一三a)
- 4 望月信亨『浄土教の起原及発達』一八四—一九六頁 同 『仏教經典成立史論』四七一—四八四頁
- 5 梁法雲『法華義記』卷六(大正三三、六四八c)

四弘誓願の源流(香川)

- 6 同 右 卷四(大正三三、六二一b)
- 7 智顗『摩訶止観』卷五上(大正三三、五六a—b)
- 8 『妙法蓮華經』卷三(大正九、一九b)
- 9 DN. III, p. 54, l. 27~p. 55, l. 2. Siam ed. DN. III, p. 57, l. 19~p. 58, l. 4.
- 10 MN. I, p. 235, ll. 30~35. Siam ed. MN. I, p. 435, ll. 3~6
- 11 『長阿含經』卷八(大正一、四九a)
- 12 『仏説尼拘陀梵志經』卷下(大正一、二二六a)
- 13 『雜阿含經』卷五(大正二、三七a)
- 14 『正法華經』卷三(大正九、八三b)
- 15 『妙法蓮華經』卷三(大正九、一九b)
- 16 H. Kern and B. Nanjo; "The Saddharmapundarika sutra". Tokyo, 1910, p. 123, ll. 2-3.
U. Wogihara and C. Tsuchida; Saddharmapundarika-sutra, Romanized and Revised Text." Tokyo, 1935, p. 115, ll. 15~17.
Shoko Watanabe; Saddharmapundarika Manuscripts", part two The Reiyukai, 1975, Gilgit Manuscript Group A, p. 56, ll. 4~5.
- 17 『影印北京版西藏大藏經』卷三〇 二四一—
- 18 Hirofumi Toda; "Saddharmapundarikastutra, Central Asian Manuscripts Romanized Text". Tokushima, 1981, Part I, Kashgar Manuscript. 123b~124a, p. 63.
Lokesh Chandra; Saddharma-pundarika-sutra, Kashgar Manuscript. Tokyo, 1977, pp. 123~124.
『梵文法華經写本集成』第四卷 梵文法華經刊行会 一九

四弘誓願の源流(香川)

七八年、pp. 306~307.

19 P. L. Vaidya; "Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā". Dharmabhaṅga, 1960. p. 215, ll. 17~21.

U. Wogihara; "Abhisamayālaṅkāra'āloka prajñāpāramitāvyaḥkāḥ". Toyo Bunko, 1932. p. 830, ll. 16~23.

20 『影印北京版西蔵大蔵経』卷二一、一五九一五一六七八

21 『道行般若経』卷八(大正八、四六五c)

22 『大明度経』卷四(大正八、五〇一a)

23 『小品般若経』卷八(大正八、五七五a)

24 『仏母出生三法蔵般若経』卷二一(大正八、六六〇b)

25 『大般若経』第四会 卷五五三(大正七、八四九a)

26 『放光般若経』卷一五(大正八、一〇一c)

27 『摩訶般若経』卷一九(大正八、三五八c)

28 『大般若経』第二会 卷四五六(大正七、三〇二a)

29 千潟龍祥『本生経類の思想史的研究』一四三頁

30 『三曼陀跋陀羅菩薩経』(大正一四、六六八a)

31 『悲華経』卷二(大正三、一七六c)

32 Isshi Yamada; "Karuṇā-puṇḍarīka", vol. II, University of London, 1968, p. 65, l. 18~p. 66, l. 1.

33 E. Senart; "Le Mahāvastu", vol. I, p. 238, ll. 13~16.

34 ibid. p. 239, ll. 1~2.

35 J. S. Speyer; "Avadānaśataka" (Bibliotheca Buddhica, III, 1), pp. 4, 16, 25, 32, 37, 43, 51, 59.

36 『撰集百緣経』卷一(大正四、二〇三b~二〇八a)

37 岩本裕『仏教説話研究序説』一三三~一三四頁

その理由として、アヴァダーナ文獻にはウバグプタ長老の權威を認めていること、そのウバグプタ長老はマトウラーを

中心にして教化活動をしていたと伝えられること、マトウラーは有部の勢力が強かったこと、などがあげられている。

38 『十誦律』卷一四、一六(大正二三、九九b、一八八a)

39 『薩婆多毘尼毘婆沙』卷四(大正二三、五三〇c)

40 『四分律』卷五二(大正二二、九五一c)

41 『不退転法輪経』卷二(大正九、二三五b)

42 『仏性論』卷四(大正三二、八二一a)

△キーワード▽ 誓願、四弘誓願

(仏教大学教授)

新刊紹介

菊村 紀彦 著

『親鸞——「教行信証」の世界』

A 五版・三百六頁・定価四、八〇〇円

雄山閣出版・昭和六十三年九月五日刊